

日程・時間	講義題目・講師	講義内容
13:10~ 開講式		
10月12日(土曜日) 第1回 13:20~14:50	「多文化共生」・「きずな」再考 ■文化人類学コース教授 岡田 浩樹	この講義では、東日本大震災が関東大震災や阪神淡路大震災と同じく、日本の社会・文化においてきわめて重要な意味をもった出来事であることを示し、文化人類学の視点から阪神淡路大震災との比較を試みる。近代以降に日本社会に広範囲に大きな影響を与えた自然災害は、関東大震災(1923年)、阪神淡路大震災(1995年)、そして東日本大震災(2011)である。この中で東日本大震災は、もっとも広範囲な地域に深刻なダメージを与え、その社会的・文化的影響が大きいと言えよう。震災のダメージは数県にまたがる広い範囲であるだけでなく、その内部には地方中小都市、農村、山村、漁村など多様な地域社会(コミュニティ)が含まれている。そこで、本講義では災害によって顕在化するコミュニティの内部の関係性や公共性の問題に注目し、そこに外部のNGOやNPOが関与する事の問題、どのような関与のあり方が可能なか、さらには「きずな」という言葉の持つ問題点などを考える。
第2回 15:10~16:40	災害とインターネット ■情報コミュニケーションコース教授 大月 一弘	インターネットは、日本では、1995年の阪神淡路大震災の際にマスメディアに発見されたことにより爆発的に普及した。個人の発する情報が国境や文化を超えて瞬間に広がる情報発信力や、離れた場所にいる人々が瞬時につながるコミュニケーション能力を知ったマスメディアが驚き、「インターネットというものが震災で大活躍」と報じたのである。阪神淡路大震災では、電子メールやWWWが情報発信や情報交換に利用された。これに加えて、2011年の東日本大震災では、You-tubeやtwitterが、さらに2013年4月の淡路島地震では、災害時の情報流通をも考慮して開発されたLINEという新しいサービスも効果を発揮したといわれている。一方、災害時におけるインターネットの情報は肝心なものが少なくつまらないものが多いとか、信用がおけないものが多いなどという意見も多い。本講義では、災害時にインターネットがどのように利用されたかを紹介し、その効果や課題を考える。
10月19日(土曜日) 第3回 13:20~14:50	インドネシアの防災文化 ■アジア・太平洋文化論コース教授 貞好 康志	インドネシアは日本などと並んで天災の多い国の一つである。2000年代に入ってから、スマトラ沖大地震・津波、中部ジャワ大地震、ムラビ山噴火など続けざまの天災により甚大な被害を被ってきた。人々の天災に対する対応には、日本と同様な面もあるが、異なる面もある。同様な面を担うのは、主にスマトラ沖大地震・津波災害(2004年)以降、急速に普及した防災意識と国際機関の援助も得て発展した防災・復興組織である。中部ジャワ大地震(2006年)やムラビ山噴火(2010年)の際には、これらの防災意識や復興組織が大きな役割を果たしたことは確かである。だが他方、日本式あるいは世界標準の防災対策(意識啓発や制度整備)がそのままでは持続的に通用しない面もある。それは一般民衆の天災観や死生観が日本や西洋とは異なるからである。インドネシアに限らず各国の防災・復興活動には宗教的ないし文化的な特色にも配慮する必要があるだろう。
第4回 15:10~16:40	「社会的なもの」の行方 ■モダニティ論コース教授 市田 良彦	3・11は「社会的なもの」を二つの意味において爆発させた。まず言うまでもなく「破壊」である。地震と震災は東北地域のみか日本全体において、既存の社会的紐帯を破壊し、「これまでどおりにはやっていけない」という意識を人々に植え付けた。もう一つは「急速な拡大」である。制度の枠を超えたところで、人々は独自に様々な社会関係を自然発生的かつ急速に拡大させている。首相官邸を取り囲んだ10万単位のデモは、一つの新しい「社会的なもの」の姿であった。私たちはつまり、「社会的なもの」の死と再生に立ち会っている。しかし、先の選挙による政権交代は、この「社会的なもの」の危うさもまた見せていないだろうか。アベノミクスの現在の「成功」は、「経済」がうまく回れば社会問題は解決されるかのような幻想に支えられている。つまり「社会的なもの」は高度経済成長時代のように「経済的なもの」に飲み込まれてしまった。それでよいのだろうか。
16:40~16:50 閉講式 挨拶		

「あらためて 震災と文化・社会を考える」



●どなたでも無料で受講できます。ただし、定員(100人)になり次第、受付を終了いたします。

●申し込み方法は裏面または研究科ホームページをご覧ください。

<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/>

1. 講座の目的と概要

私たちの既成の価値観、世界観を根本から揺るがした東日本大震災から二年がたちました。阪神・淡路で被災した神戸との関連でもいくつものシンポジウムや講演会が行われています。しかし、あらためて問いたいと考えてこの公開講座の企画は生まれました。3・11は、震災は、私たちに何だったのか、何を突きつけてきたのだろうか、と。直接被害を被らなかった私たちは、あるいは直接被災した人びとでさえ、ともすると頭のなかで復興計画や未来予想図を描くことに一生懸命になってしまって大切なことに目がゆきとどいていないことがあります。そういった問題意識で今回の公開講座は組織されたのです。国際文化学研究科には、一見そぐわないテーマであると思われるかもしれませんが、あの震災をきっかけに、二年後の今、考えること、考えていることをそれぞれの分野から持ちよりました。いろいろな専門から演者が立つことになりましたが、このことは、震災が分野を問わず与えた影響の大きさ、であるといえるかもしれません。

2. 期間及び日程

平成25年10月12日(土)、10月19日(土)の2日
 詳しくは裏面の「講義日程・題目及び講師」をご覧ください。

3. 受講対象者

一般社会人、学生(中学生以上)

4. 募集人員

100人(先着順受付)

5. 講習料

無料

6. 受講申込方法

- (1) 受付期間: 平成25年9月2日(月)から9月30日(月)まで
 ただし、定員になり次第、受付を終了します。
 申込期間外の受付はできません。上記期間内にお申し込み下さい。
- (2) 申込方法: 同封の「受講申込書」に必要事項を記入し、下記に郵送、FAXまたはe-mailで送信してください。「受講申込書」は研究科ホームページ(<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/>)よりダウンロードすることもできます。
 〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1
 神戸大学大学院国際文化学研究科総務係
 FAX番号078-803-7509
 e-mail gicls-soumu@office.kobe-u.ac.jp
- (3) 問い合わせ先:
 神戸大学大学院国際文化学研究科総務係
 電話番号 078-803-7515
 e-mail gicls-soumu@office.kobe-u.ac.jp

7. 公開講座会場

国際文化学部・国際文化学研究科
 F棟301教室(3階)

8. 公開講座会場の案内図

- 交通機関
 阪急六甲駅、JR六甲道駅、阪神御影駅より、
 神戸市バス16系統「六甲ケーブル下」行きに乗り、
 「神大国際文化学部前」下車



(注)⑬は、神戸市バス16系統六甲ケーブル下行
 ⑭は、36系統鶴甲(つるかぶと)団地行